現代俳句岡山

第55号

令和6年3月発行

おかやま県民文化祭参加
第二十八回岡山県現代俳句協会俳句大会

とき　令和五年十月二十二日（日）
ところ　岡山県ゆうあいセンター

開会挨拶（木村会長）

今年は十月というのに未だ三十度を超える日もあり異常気象を案じるこの頃だが、当日は澄んだ秋空のもと三十一名の参加があり、ゆうあいセンター二階大会議室で開催される。

昨年まで数年間はコロナ禍により、食事も控えての大会で午後からの開催、句会も出来ない状況であったが、今年は四年振りに以前と同じかたちでの俳句大会を開催することができた。

大会前には恒例となる席題句が会長、副会長、顧問より発表され、各二句が投句された。

定時となる十一時より木村ゆきこ会長から「今回は新会員も多く迎え、地区の活動にさらに発展、充実させる会となるようにしたい」との開会の挨拶があった。

続いて俳句大会では、前田宏事務局長より大会の選句経過報告。秋岡宣子副会長、土屋鋭喜事務局次長の司会で入選句の選評の後、活発な議論がおこなわれ初参加の会員も充実した会となったようだ。

昼食時間中に席題句の清記、互選が行われ、十三時三十分より佐野由魚副会長、小西瞬夏幹事の司会進行で午後の俳句大会が開かれた。句会では全員が発言し、結社や句歴も様々な会員が耳を傾け有意義な会となった。

表彰式では花房典子幹事、万波照世幹事により入選句の披講が行われ、木村会長から賞状と副賞が授与され、参加句友から拍手が贈られた。

県の参加事業として開催された俳句大会は秋岡宣子副会長の挨拶で全日程を終了した。

また、中国地区各県会長賞について　ぜひ来年度より各県の会長に講評を頂きたいという話があり次回は頂くこととなった。

今回の俳句大会では、印刷ミスにより作品集に各県の会長賞名の記載ができておらず、心よりお詫び申し上げます。

（前田　宏）

第二十八回岡山県現代俳句大会受賞作品

【おかやま県民文化祭賞】

さようならの握力木の実降りやまぬ　古川　麦子

【岡山県知事賞】

秋光のほとけにながきくすり指　天野　光暉

【岡山県議会議長賞】

朝顔や出入り自由の島の宿　小西　邦子

【岡山県教育委員会教育長賞】

袋掛け愚痴も本音も閉じ込める　保田　紺屋

【岡山県現代俳句大会賞】

イーゼルを立てしままなり星月夜　花房八重子

白南風や着信音を変えてみる　木村ゆきこ

腸の右に片寄る昼寝覚め　小西　瞬夏

ゆく雲に誘はれさうなハンモック　前田　宏

ソーダ水泡の弾ける初デート　中野　澄子

落款のずれなき軸の涼しさよ　花房　典子

空蝉や髭の先まで脱ぎ捨てて　福島　律子

もう少し生きてみやうか小鳥来る　沼本　養卯

天空の城ありさうな夏の雲　岩田　志乃

つないだ手ほどけてとおし野紺菊　薄　和子

あとは待つだけ夏蒲団ありつたけ　秋岡　宣子

一本のリハビリの紐月涼し　豊田　級衣

止水栓へくそかづらのからまりぬ　國富　節子

島唄の四海にひびき海紅豆　國富　柿方

遠雷や魂二十一グラム　柏瀬眞理子

風鈴に南部なまりを学びけり　永禮　宣子

【中国地区現代俳句協会会長賞】

山口県現代俳句協会会長　久行保徳賞

風鈴に南部なまりを学びけり　永禮　宣子

広島県現代俳句協会会長　川崎益太郎賞

1ミリの蟻も持つ武器と命と　竹井　愛子

鳥取県現代俳句協会会長　植垣規雄賞

もう少し生きてみやうか小鳥来る　沼本　養卯

岡山県現代俳句協会会長　木村ゆきこ賞

朝顔や出入り自由の島の宿　小西　邦子

席題句　主な作品

芒原抜けて少年脱皮する　木村ゆきこ

人道の言葉のかろき神の留守　土屋　鋭喜

朝寒や一呼吸して点くテレビ　黒瀬　琢葉

少年の口紅やさし祭笛　永禮　宣子

秋の日の蛇口ひとつの更地かな　四宮　和美

手作りの土俵新たの秋祭　保田　紺屋

ドクターのキーを打つ音そぞろ寒　小西　邦子

少年は道草が好き赤とんぼ　三宅　章文

芋づるの重い歴史を摑みける　佐野　由魚

穴バケツ捨てずにをらばチチロ鳴く　岸本　順子

子らよりも世話人多し秋祭　目賀　紀子

七人の子に大人ぞろぞろ秋神輿　万波　照世

露けしや遺品にポイントカード群　古川　麦子

脈拍のひとしくありて神の留守　小西　瞬夏

鈴の音の移ろひ易し神の留守　國富　柿方

いのこづち避けてとほれぬ山の径　天野　光暉

遠巻きの少年の背よ秋祭　秋岡　宣子

口伝ての昔語りを少年へ　畦田　恵子

声高き少年剣士鵙の晴　髙橋つらら

秋まつり出窓格子の残る浦　薄　和子

秋祭兵児帯ずらす石の段　倉見　雯匝

第二十四回吟行会

衆楽園吟行記

保田紺屋

とき　令和五年十一月十九日（日）
ところ　衆楽園（津山市山北）

久しぶりの県北での吟行会は、国指定名勝旧津山藩別邸庭園「衆楽園」で開催された。当日はちょっと寒かったものの、雲ひとつない吟行日和に恵まれ、参加者は三十二名であった。

今回は、近隣では体験できない「曲水の宴」を実演してほしいとの依頼があり、津山市公園課、文化課などと相談し、園内水路の流れを確保、佐野由魚副会長より「曲水の宴」の説明をうけ、秋の花を乗せた大朱盃を流した。

句会は衆楽園内の迎賓館で行われた。出句された六十四句に次々に評や感想が出されとても盛り上がった。三鬼の俳句などに曲を作り発表されている作曲家の矢内直行氏も参加され、初の俳句作りを楽しんでおられた。

印象に残った一句を紹介し吟行報告とする。

枯れ蓮の土橋の袂ふと三鬼　亨祐

竹内亨祐さんは、長年綱俳句会で活躍し「曲水の宴」の手伝いもされていて、思いが届いたと喜んでおられた。

主な作品

枯れ蓮の土橋の袂ふと三鬼　竹内　亨祐
まず一歩松の落葉の衆楽園　薄　和子
曲水の朱杯に冬日溢れさす　小西　瞬夏
菰巻きや大樹ありまた幼木も　中力　治
前撮りの笑みやはらかし冬紅葉　藤原由美子
足音に口持ち上げる小春鯉　豊田　級衣
投句箱に鉛筆のあり鷹の空　前田　宏
着膨れてお久しぶりと迎賓館　黒瀬　琢葉
鶴丸は森家の家紋小六月　保田　紺屋
秋深し誓子の句碑は東向き　右手　采遊
出迎へは小さき渓流冬の音　國富　節子
小春風に乗り作州人に逢ふ　秋岡　宣子
西風の誓子の句碑や冬うらら　國富　柿方
切り株の年輪朽ちて小六月　平元　薫
冬の池あの世此の世の別れ道　小林　透亘
鶴山の秋へ置く備中やぐらかな　木村ゆきこ
衆楽の池よりあふれいわし雲　永禮　能孚
朱盃流るどんぐり沈む小川かな　天野　光暉
行く方の紆余に流るる枯葉かな　井上えつ子
津山藩の話深入り冬もみぢ　花房　典子
曲水を流る朱盃や小春の日　見手倉美砂子
こも巻きの松は艶めき水静か　矢内　直行
菰巻の松の古木に小春かな　福島　翠夕
散紅葉まくらに覚めて罔象女　四宮　和美
翔平ＭＶＰ衆楽園の鴨騒ぐ　佐野　由魚
芒原乾いた空の飛行雲　倉見　雯匝
天を突く如く突き出し鴨の尻　岩田　志乃
それぞれの吟行すすむ小春かな　沼本　養卯
池の面の松の落葉の織りし綾　畦田　恵子
美作の晴れて紅葉の流れかな　白髪佳代子
今を生きる命あたたむ彩紅葉　髙村　蔦青
冬晴れや池のさざ波そこここに　小林　直岑

令和五年度後期 新会員
作品集

令和五年度後期の現代俳句協会への新会員として、推薦し、承認を得た。
ここに作品を特集して紹介にかえる。

■ 中上　久子／断捨離　所属〔縹〕

農道の果て六月の大落暉
短夜の開きしままの歎異抄
思ひ出のつまりし夏の家終ひ
断捨離の押入れ軽し秋うらら
自販機の品切れ多し滝涸るる

■ 阿部　真子／コロナ明け　所属〔縹〕

少年の朝あかるくす雪達磨
蕗のとう少女たまごを割る構え
鶏を田んぼに放つ西東忌
淋しげな赤とはちがう冬薔薇
にっぽんの唄聞き足りて寒明くる

■ 青木　良太／　所属〔菜の花〕

仲間より一羽外れて声冴ゆる
春浅し島猫の目は海の色
竹筒の底から聞こゆ春の音
解体のホテルに残る躑躅かな
西日差す優先座席空いており

■ 小西　邦子／菜種梅雨　所属〔菜の花〕

泣かせぬとの約束は反故菜種梅雨
母ほどに父を知らずや春の雪
梅雨晴間穴の中から配管工
人の名の出かかって出ぬ文化の日
京都0番線に居て秋暑し

■ 安井　玄／山ある風景　所属〔縹〕

擂鉢の底に一村寒明くる
囀りの底はつらなる山の尾根
山田へと轍ひとすじ春の泥
囀りへ寄るを拒める丸木橋
ふるさとの石橋木橋水温む

■ 福島　律子／　所属〔菜の花〕

みずすまし水輪くずさず移動せり
羽根一枚池に残して鳥帰る
落椿影も日向も明るくて
一人でもクリスマスイブ鳥焼いて
朗吟のほてりし頬に雪が舞う

■ 仲村　宗伯／春夏秋冬

石段を踏みしめ上る初詣
宝木取る備前平野に春足音
代掻きて水穏やかなる月明り
孫走る負けても拍手運動会
北風に白き波打つ瀬戸の海

■ 三宅　章文／メケ・メケ

けど君は犬なのですよハチに東風
節分の空二周目の観覧車
梅東風やゆきこ先生笑てはる
鐘を打つ引く手に力寒椿
朝の空鷹寒林へ急降下

私の感銘句

畦田　恵子　選

初夏の風四軒建つという更地　稲田マスミ

一年の内、最も安定した気候の時期であり、語感にすがすがしさのある季語である。更地になる前からの経過を辿ると……、私の近所の、廃校になった小学校跡地再建までの道のりと重ねてしまう。少子化、人口減が喫緊の課題の今、更地になんと四軒も。まさにすがすがしい朗報である。

秋海棠残り時間の真珠色　木村ゆきこ

秋海棠は、九月頃淡紅色の花がうつむくように咲く。芭蕉も詠んでいるように、古くから日本で親しまれていた花である。さて、残り時間のとらえ方は様々。余生とも取れる。花と同様に真珠もまた、清楚で多様な色合いが楽しめる。残り時間に明るい希望を託したい。

ぶどう剥くしどろもどろになりながら　國富　柿方

しどろもどろとは、話し方などが、筋が通らずあっちにつかえ、こっちにつかえるさま。ぶどう剥くと絶妙な調和だ。どうも近頃、しどろもどろになることが多くなったのは、私ばかりではないようである。

私の感銘句

古川　麦子　選

駆除されしアシナガバチの美しき　佐野　由魚

ここにアシナガバチの死がある。ひた向きに生きて来た美しい死である。「駆除」の二文字が刺さってくる。氏の作品にはこのように動物への哀惜の情を深く感じるものがいくつかある。虚を俳し構えず、自由な作風がリスクを抱えながらもストレートな表現のその裏には納得せざるをえない詩がある。

秋灯下古寺巡礼の土門拳　國富　柿方

さて、土門拳である。例えば、秋灯下古寺巡礼の笠智衆であったらどうだろう。いや、俳句とはそんなものではない。いつの間にか作者の中に棲みついたあの強くきびしいそしてやさしげな土門拳なのである。ドモンケンと音にしてみる。時空を越えて、レンズの向こうにたしかに誰かいる。季語の秋灯下にはこの作者独特のこだわりがあり、それによってくっきりとした陰影とともに一人の男が立っている。

秋うららう埴輪の妊婦はにかみて　國富　節子

（はにかむ）。この言葉と久し振りに対面する。秋のもつ明るさ、はかなさがいつの間にか結びついてゆく。この健康的なエロチシズムは言葉のなかった太古の昔からのものであった。秋の日ざしの下で胎児の鼓動を感じている。（秋うらら）の選択はこの作者のゆったりとした感性のあらわれであろう。

私の感銘句

土屋　鋭喜　選

日参の地蔵に先客雨蛙　稲田マスミ

近くのお地蔵様へお参りするのが日課となっている作者。この日に限り先客あり。ドキッとして次にホッとして、そして笑ってしまった。

点滴の針痛点に走り梅雨　倉見　英子

人の皮膚には痛点・冷点・圧点・温点の感覚のポイントがある。痛点の分布が一番多いのだが、注射や点滴針は理屈なしに痛い。折しも降り始めた梅雨の一滴一滴が腕の痛点めがけて降り注ぐような鬱々とした気持ち。

断捨離の前に着てみる古浴衣　黒瀬　琢葉

断捨離はなかなか進まないもの。懐かしいもの一点一点に振り返ってしまう。ついには捨てるつもりの浴衣に袖を通してしまった。

諸家近詠

繁森　明美

元旦や四方に拍手響かせて
風花すホームの夫は無口なり
若かりし父母の写真や福寿草
古本をうっちまおうか寒の明け
上向きにぼたんと落る紅椿

四宮　和美

無花果を割りてひとりの守衛室
堰落つる水の白さも小六月
民話よむ声に重なり春時雨
蛇いでて八幡様の二百段
一輪車伏せたる畑や鼓草

薄　和子

萩の昼夢二の猫のよぎりたる
菜を間引く真水のような心にて
作の国ごんご通りの初しぐれ
風が鳴る寒弓月の折れそうで
寒月光メタセコイアの矜恃かな

鈴木　文子

檻越しに鶴の啼き合ふ暮の秋
警策の音いくたびも小春の日
張子の竜もつと首振れ歳の市
ほろ酔うてみな狐火になつてゐる
寄せ鍋やまたも話の込み入りて

髙橋つらら

おばちゃんのおまけ輪島の蛍烏賊
枯露柿の飴いろ能登の波しぶき
ゆるゆると配膳ロボットくる御慶
恵風や花粉アンテナぴぴぴのぴ
改名やミモザ色した鳥生まる

髙村　蔦青

春愁や初版より積む句誌の嵩
踏青や暮れ際光る峡の川
天へ抛る児の燥ぎ声春の風
のどけしや揺られて眠くなる赤子
花屋より春の風抱き戻りけり

塚原　恒子

湯のたぎる音にまじりて虎落笛
不器用な箸で海鼠を持て余す
心地よき経の響きや節分会
人生も余白となりて冬銀河
園児等の手毬遊びや良寛忌

土屋　鋭喜

よちよちのかつちん留めや母子草
キッチンカー冷かしてゆく農具市
啓蟄やパワーショベルのかつくんかつくん
持続可能な国であらうか目刺焼く
芽柳や夜半に雨の降つたらし

豊田　級衣

コンビニのスイーツあれこれ卒業す
急用で絵本飛び出すかたつむり
とにかくも手足ブラブラ夏に入る
一本のリハビリの紐月涼し
着膨れて軒下で待つラーメン屋

永井麻紀子

おにぎりは良い塩梅に良寛忌
吾が城に近づくなかれ枯木星
春隣空一面を水彩に
お隣に来客のあり春一番
はらはらとシュークリームに春の雪

中野　澄子

夫の旅今どの辺り蝶々来る
うららかや白髪ほめ合ふ同い年
初桜息をしづかに仰ぎけり
一族につるんと生れ豆の花
はさみあぐ骨の白さよ蝉しぐれ

反復の独り言など日向ぼこ
爺ひとり婆のみたりや日向ぼこ
向ひ家の軒先借りる日向ぼこ
端つこで良ければどうぞ日向ぼこ
陰口と愚痴を交互に日向ぼこ

難波　正夫

金蓋をめくる鯖缶冬に入る
顔の幅ほど窓開けて冬の星
残像は羽織るマントの太宰治
左義長や炎が炎焼き尽くす
伊勢海老の二日酔ひならこの寝相

難波　正範

目映きや仕事始の神田川
男子らの窓に群がる冬の雨
賑やかなお昼の内部受験生
雪兎ならぶ大学食堂前
春近しシロクマのぬいぐるみぶらり

新田　啓

枯菊の美しきを焚きて花供養
初春やただ戦争を観てをりぬ
ぽちぽちと老四・五人のとんどかな
子らの聲と書き初め消えし左義長や
うずうずと出番待ちゐるお雛さま

沼本　養卯

春一番回転木馬動き出す
五月雨や涙はいつか乾くもの
木耳の銀の雨音聴いてゐる
野の風に子を抱き上げて泡立草
名にし負ふ烏城の松の冬構

橋本　幹夫

踏み石は海の石なり西行忌
鳥ぐもり屋敷に残る防空壕
古墳から古墳をながめ小六月
百の石ひとつに組まれ虫時雨
北行きの一駅ごとに冬ざるる

花房　典子

新会員候補者推薦のお願い

新会員候補者は、会員各位の個人推薦により選出されることになります。

会員のみなさまの周辺に、協会員に相応しい方がおられましたら、所定の「入会申込書」により、是非、ご推薦くださるようお願いいたします。

現代俳句協会

列島春秋　地区別現代俳句歳時記

二〇二四年掲載

一月　奥備中むかし氷柱も腹の足し　天野　光暉
二月　鯛焼の長い行列植木市　佐野　由魚
三月　春の潮渦たかまりて瀬戸大橋　岸本　順子
四月　みまさかの四方八方山笑ふ　黒瀬　琢葉
五月　自刃の間二畳を過る黒揚羽　小西　瞬夏
六月　マネとモネこんがらがりて蔦青し　佐藤　千恵
七月　山滴る鬼ノ城門を要とし　鈴木　文子
八月　目の端に美しき人追ふ踊りの輪　宮下　哲朗
九月　遅れてきたギターの醸す秋の音　永禮　宣子
一〇月　火襷の皿のざらつく秋時雨　花房　典子
十一月　一休寺枯山水に秋の雨　池上栄美子
十二月　十二月八日広場に残るパイプ椅子　薄　和子

令和六年度 総会のご案内

日時　令和六年四月十七日（水）
　　十一時～十五時
会場　岡山県ゆうあいセンター
　　（きらめきプラザ）大会議室
　　岡山市北区南方二丁目十三―一
　　（旧国立病院跡）駐車場有り
会費　二千円（昼食費、会場費、その他）

議事
①令和五年度事業報告・会計報告
②会計監査報告
③令和六年度事業計画案・予算案
④会費・会則変更
⑤その他

報告・連絡事項
①新会員の紹介
②第四十二回中国地区現代俳句大会・
　総会（島根県）
③その他

◇総会終了後、持ち寄り「ミニ句会」を開きます。（雑詠二句）

第四十二回 中国地区現代俳句大会ご案内

とき　令和六年六月九日（日）
紙上大会（島根県）

第六十一回 現代俳句全国大会

とき　令和六年十一月十六日（土）
ところ　奈良県

令和六年度 行事予定

○総会
四月十七日（水）
岡山県ゆうあいセンター

○第二十九回現代俳句大会
十月十二日（土）（予定）
岡山県ゆうあいセンター

○第二十五回吟行会
十一月四日（月・振替休日）
岡山後楽園

○通信句会
6/6(日)・9/1(日)・12/1(日)・3/2(日)0時投句締切
岡山県ゆうあいセンター研修室

ご逝去　心よりご冥福をお祈り申し上げます。
永禮宣子様　令和六年二月二十七日

事務局・編集部だより

▽第二十八回岡山県現代俳句大会、第二十四回吟行会：津山衆楽園、第三、四回の現俳句会と一年の行事の大半が後半に集中しましたが、参加者のみなさまのご協力により令和五年度の行事も終了することが出来ました。今年度も四月より令和六年度総会、第四十二回中国地区現代俳句大会、吟行会と行事があります。お誘い合わせの上、ご参加ください。

▽会報五十五号をお届けします。ご多用中、原稿にご協力有難うございました。（前田　宏）

▽令和六年度会費の振込用紙を同封しました。よろしくお願いします。
前年度分まで未納の方は合わせてお振り込みをお願いします。（薄　和子）

会報他受贈深謝
各県、各地区より会報、句集等、贈呈いただき有難くお礼申し上げます。

現代俳句岡山・第五十五号
令和六年三月三十一日発行
発行責任者　木村ゆきこ
発　行　所　岡山県現代俳句協会
編　集　人　前田　宏
事　務　局　〒七〇〇―〇九七五
　　岡山市北区今八―二―二八―三〇一　前田宏方
TEL・FAX（〇八六）二四六―〇七六二